論文の内容の要旨

論文題目　二十世紀前半の中国教科書に見る日本人像
——交流と摩擦の軌跡——

氏名　　徐　氷

20 世紀の百年間、中国と日本は波乱万丈の歳月を歩み、日中関係は晴れ、後曇り、と時々嵐さえ起こった。複雑な日中関係において、昔から今日まで、教科書問題は時には政治問題、国際問題にまで上昇し、日中関係を左右する重大問題になったといっても過言ではなかろう。

現在、日中両国は教科書問題、または靖国神社参拝、釣魚島（日本では尖閣列島）などの問題をめぐってまったく異なった立場を示している。戦後、教科書問題で、日中両国は1982 年からすでに 24 年間激しく対立してきた。その対立は双方の国民感情にまで浸透しようとしている。日中間教科書問題の本質は、日中両国の歴史認識の差異によるものであると言われる。中国側は、日本の教科書が日本国民に歴史の真実を教えないばかりでなく、故意に歴史を歪曲し、侵略戦争を否定し、美化するものであると見ている。一方、日本側は中国が日本の教科書を批判するのは内政干渉であると主張し、さらに一部のマスメディアと政治家は、中国の歴史教育にも多くの問題があり、中国政府は反日教育を通じて、若者の日本に対する反感を育成しようとしているではないかと疑っている。

果たして日中間の教科書問題の本質はどうであろうか。この問題を解明するには、近代以来今日までの日中両国教科書に見る相互認識のプロセスを徹底的に検証し、事実に基づいて、客観的、科学的な分析を通して、初めて公正的な結論を出すことが可能であると思う。感情的な相互攻撃は誤解を深めていくことで、問題解決、日中関係の改善を阻害さえするものとなろう。しかし、日中両国のマスメディアにも、学界にも、この基礎的な考察と研究に取り組む人が極めて少ない。

現在、交通通信手段、マスメディアが発達しているにもかかわらず、実際上は、多くの中国人は今日の日本の社会と文化、日本人についてはあまりにも知らない。とくに日本人の勤勉さ、優しさ、誠実、同情心に富む、などの好ましい面は知られていない。[1]彼らの日本認識の原風景と源流は、主に戦時中の日本と日本人によるものである。換言すれば、現代中国人の日本認識の大部分は旧日本軍人を主体とする戦前の日本人に対する認識であると言えよう。戦後、多くの中国人が日本に留学し、大勢の日本人も中国を訪れ、日本の情報が絶えず増えているが、しかし、その声が低く、伝播の範囲は限られ、従来の中国人の日本認識を変えるには十分ではない。

国家、国民の意識形成における教科書の役割と影響力は非常に大きいもので、 いずれの国でも教科書は子供達に知識と教養、能力を身に付けるメディアであると同時に、一国の民族教育、国民の魂を養う道具でもあると考えられる。また教科書は自民族の歴史を教えるとともに他国との関係を伝え、子供達の国際意識を養う。

中国教科書の日本記述は、世代から世代へと中国全土の青少年に日本を紹介し、理解させる窓口として重要な役割を果たしてきた。小中学校、高校で教育を受けた中国人は長年の学習の中で次第に印象を強めながら、日本に対する基本的な態度を固めていく。また教育で得た知識は、新聞雑誌などからの知識や、直接的あるいは間接的に接触した日本や、日本人に対する印象と重なり合って、日本イメージの全体像が形成される。少年時代の教育は人の一生に無視できない影響を与えるものである。それゆえに、学校教育と教科書という巨大な体系は、中国人の日本認識を育成する上で、極めて重要な作用を果たしてきた

と言ってよい。20 世紀前半、中国の教育普及度はまだ低く、教育を受けた中国人は社会のエリートとして、国家と社会の各分野で活躍する中堅となっていた。彼らの日本認識は、教育を含むさまざまな経路を通じて社会の中に不断に広がり、やがて日中関係にも決定的な影響を及ぼす大きな作用を発揮したのである。

中国教科書の日本記述はまた、その時代の中国人の日本認識を直接に反映している。教科書は各学科の知識を教授するなかで、随時、日本についても紹介しているが、そこには教科書編集者の意図すると否とにかかわらず、政治、文化、経済、軍事などの各分野での日中関係が反映されざるを得ない。我々は、各学科教科書の日本関係記述の変遷を跡付けることを通じて、近現代における中国人の日本認識の原風景とその形成過程、変遷過程を考察することができる。それぱかりでなく、日中関係の変化の軌跡とその内在要因を見出すこともできよう。さらに教科書の記述の分析を通じて、近代以来の日中交流と摩擦の特質を抉り出すことも可能であろう。

本論文では四章に分けて、近代中国教科書の発足と日本、清朝末期中国人の日本認識の軌跡、20 世紀前半の中国教科書に見る日本人像、20 世紀前半の日中間教科書摩擦、近代中国の日本認識と日中間の文化交流と摩擦の歴史を順次考察する。

第一章と第二章においては、既に刊行された諸資料・先行研究に基づいて、近代中国教科書の形成される経緯を跡付けることに主眼を置いた。次に第三章、第四章においては、先行研究に加えて筆者自身が集めた教科書資料に基づいて、そこに見られる日本人像の形成と変異を記述・分析することを試み、さらに対日感情の変異を基盤とする教科書摩擦問題を代表的な四つの時期を選んで個別に論じる。この部分が本論分の中心をなすものであり、今までに知られない知見が得られるであろうと思う。

まず第一章では、従来の「天朝大国」の夢より起こされた中国は、近代に直面したとき、洋務運動で西洋を学ぶ試練を経た。その後、日清戦争の大戦を交えたばかりの敵国にもかかわらず、そして、歴史上長い時期の下位国、「徒」たるものであったにもかかわらず、激動の時代を生き残るために、日本を近代化のモデル、「師」として拝した。このプロセスを、中国近代教育の変革と教科書の成立という視点で概要的に回顧した。中国の近代化の過程における日本の作用を評価しつつも、隠されていた内在の矛盾も少し触れ、後の章の教科書に現れる日本に関する記述を理解するための土台としたい。

第二章では、古代の中国人の日本認識とその背景をごく簡単に紹介した上で、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、中国人の日本羨望、日本警戒、日本征伐、日本師事など、その交差した日本認識の軌跡を探ってみる。そして、日清戦争後の「征倭論」から「日本師事」への転換過程を分析し、日本と中国の政治、文化関係の逆転が、その後の両国関係に暗影を投じ、それが次第に蟄ってゆき、結果的には嵐となった初期段階を考察する。

第三章では、中国近代歴史の展開に即して、1902 年ごろ、中国の教科書に日本と日本人像が初登場以来、文明書局、商務印書館、中華書局などの教科書出版の主要機関が編集、出版した教科書より日本と日本人のイメージを割り出し、日中関係の背景において分析した。時代ごとに変化していく中国人の日本認識の原風景と変化軌跡を教科書という一側面から捉え、その形成過程と時代特色を捻出するように試みる。

第四章では、中国と日本の両方の史料に基づいて、日中両国間の政治衝突と文化摩擦を平行線に、繰り広げられた戦前日中間教科書摩擦の実態を探った。今まであまり知られていなかった歴史的事実であるが、戦前において、日本と中国の間では、1914 年、1918－1919 年、30 年代初期、1937 年 7 月 7 日、少なくとも四回の教科書摩擦があったことを解明した。そして、各回の事件の裏づけになる背景、事件の経緯、日中関係に与えた影響などを考察し、分析しようとする。戦前では中国人の反日感情は中国政府主導の反日宣伝と

反日教育によるものである、という日本側の「政府主導説」が、現在になって、また現れ、それは戦前とは同一性があると筆者は考えている。

最後に本論文で得られた成果を踏まえて、本論文で扱った時代における、中国人の日本認識の特徴と思われるものを抽出し、教科書を舞台とする摩擦の背後に一定の様式（パターン）が潜んでいることを指摘しておきたい。さらに両者を参照しつつ、日中関係の政治的、文化的、社会的な諸側面に見られる関係構造、筆者が「二次転換構造」と呼ぶ両国間の関係を規制する基本構造に就いて筆者が考えるところを仮説的に述べて見たい。